

## ① 名古屋市におけるクモ類の概況

名古屋市で記録されたクモ類は42科352種である(緒方, 未発表)。日本産のクモ類は1,617種(谷川, 2017)で、愛知県産は52科590種である(緒方, 2019)。本市のクモ類は、日本産クモ類の約21.2%、愛知県産の約59.7%にあたる。だが、日本産クモ類は毎年新種記載や、日本初記録として発表されているので、2019年度では1,650種を超えていると思われる。

以下に、市内の地域ごとに、それぞれの状況を記述する。

### 東部地域(東部丘陵地)のクモ

本内はほとんどの地域が都市化され、クモの住む環境は狭められている。その中であって、この東部地域は北には、東谷山を中心とした守山区志段味地区や小幡緑地、南には緑区の大高緑地など、丘陵地やそれに付随する湿地・ため池が残されていて、二次林から成る樹木も多い。そのため、生息するクモの種も比較的豊かである。市内で最も種数が多いのも小幡緑地で、28科158種が記録された(緒方, 未発表)。中でも、スジプトハシリグモやテジロハリゲコモリグモは湿地にのみ生息する。次は大高緑地で28科142種が記録された(緒方, 未発表)。特徴としては、おもに里山に生息するアオオニグモやトリノフンダマン類も生息している。近隣する大高城跡は史跡として保存されている。その一角にツバキを主体とした樹木が生い茂り、その根本の土部に地中性のカネコタテグモが十数頭生息している。市内でも貴重な生息地になっている。

この地域で記録されるクモとしては、ジグモ・キシノウエトタテグモ・シャラクダニグモ・オオセンシヨウグモ・ニホンヒメグモ・コンピラヒメグモ、チリイソウロウグモ・ヒシガタグモ・ジョロウグモ・マルツメオニグモ・スズミグモ・アオオニグモ・ビジョオニグモ・コガタコガネグモ・ゲホウグモ・ヤマシロオニグモ・サツマノミダマシ・ウロコアシナガグモ・アシヨレグモ・アシナガサラグモ・ササグモ・シモフリヤチグモ・ヤドカリグモ・ハナグモ・コハナグモ・マミジロハエトリ・ネコハエトリ・アリグモなどが挙げられる。

現在まで、この地域で確認されていない稀産種のひとつ、キジロオヒキグモとマメイタイセキグモも発見される可能性を残す地区である。

### 中央部地域(中央台地)のクモ

この地域のほとんどは市街化されている。そのため生息するクモ類の数も種数も年々少なくなっている。そんな中、熱田神宮の森は豊かな自然が保たれている。ここで記録されたクモ類は2011年8月~2012年11月までの延べ16回の調査で、29科108種が確認された(須賀・緒方・柴田, 2013)。中でも、2012年7月22日に発見されたチビクロドヨウグモは本県初記録種で、現在も唯一の生息地である。その後、2013年2月24日の追加調査で発見されたナシジカレハグモも本県初記録であったが、2016年11月17日に名東区牧野が池の林内からと、2017年12月5日に豊田市小坂本町の雑木林から相次いで発見された。なお、キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモ・クスマダニグモ・ナナホシヒメグモ・シマゴミグモ・ナナメケシグモ・ヒナハグモ(その後の精査でカギハグモは誤同定と判明)等も本市では貴重な種のひとつである。更に、2018年9月12日の調査では、新たにコケヒメグモ・アシプトハエトリ・エキスハエトリなどが確認され、30科122種となった(緒方未発表)。昭和区にある興正寺の社叢林もクモ類の生息にとって重要である。市内ではたいへん珍しい山地性のトゲグモが2014年7月22日に観察された。地中性のキシノウエトタテグモは、土地開発等で生息地が年を追う毎に失われている。しかし、ここを中心として昭和区・瑞穂区・天白区の丘陵地には、現在も数多く見られることは嬉しい事である。ただ、これらの地域も年々環境破壊が進み、クモ類の種や個体数は減少の一途をたどっている。

この地域で記録されたクモの一部を列挙すると、ジグモ・ワスレナグモ・ダニグモ・サトヒメグモ・ゴマダラヒメグモ・ナナメケシグモ・ビジョオニグモ・ムツボシオニグモ・チュウガタコガネグモ・スズミグモ・サガオニグモ・ナガズキンコモリグモ・ヤマヤチグモ・ムナアカフクログモ・マダラフクログモ・シノノメトンビグモ・マツモトオチバカニグモ・オビボソカニグモ・コガタネオンハエトリ・タイリクアリグモなど

が挙げられる。

#### 西部地域（沖積地）のクモ

港区の臨海工業地帯の緑地にはハルカケチグモやタイリクケムリグモなど、他の地域では見られないクモが生息する。庄内川河口付近の小規模な葦原はプラスチックゴミ、廃棄物、流木等が漂着しているが、その様な環境化にカコウコモリグモが徘徊し、繁殖している。本県では豊橋市紙田川河口、田原市汐川河口に次ぐ3ヶ所目の貴重な産地である。また、稲永公園の松林にはホシジロトンビグモやトサハエトリなど採集例の少ない種も生息する。名古屋港に近い公園の側溝や排水溝の隙間などの人工物には、外来種のマダラヒメグモやオダカウレイグモが生息している。同じく、特定外来種のセアカゴケグモは臨海地帯から分布を拡大し、今や本市や県内に広く分布している（緒方，2014）。本種は1995年に大阪府高石市や三重県四日市市で発見され、「毒グモ」として大きくマスコミに取り上げられ話題になった。なお、本県初記録は常滑市中部国際空港で、2005年8月19日である。同じく特定外来種のイロゴケグモは、1995年12月17日に港区で雌1頭が発見されたが、その後は見つかっていない（緒方・小笠原，1997）。

この地域に生息するクモの一部を列举すると、ジグモ・ワスレナグモ・ヒラタグモ・ノコギリヒザグモ・マルムネヒザグモ・ニセアカムネグモ・セスジアカムネグモ・ナガコガネグモ・イエオニグモ・ナカムラオニグモ・ウヅキコモリグモ・トガリアシナガグモ・フジイコモリグモ、ネコハグモ、ヒメフクログモ・ヤドカリグモ・ヤミイロカニグモ・アオオビハエトリ・アダンソンハエトリ・イソハエトリなどである。

#### ② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、名古屋市として絶滅危惧種のリストに挙げたクモ類は、絶滅危惧ⅠA類（CR）7種、絶滅危惧ⅠB類（EN）3種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）8種、準絶滅危惧（NT）9種、それに情報不足（DD）3種での合計30種である。本市産のクモ類は2019年現在352種で、約8.5%にあたる。

環境庁の「レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-7 その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）」（平成26年）によると、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）1種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）6種、準絶滅危惧類（NT）5種、情報不足（DD）3種、合わせて17種が掲載されている（NT）には名古屋市のリスト中にカネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモの4種が含まれている。この数値は今回取り上げた名古屋市の数値に比べると極端に少ない。現実には、全国的に見て危機に瀕しているクモ類は、この17種以外にまだまだ数多くあり、また、自然破壊の著しい大都市としての環境を考慮に入れれば、名古屋市の8.5%は妥当な数値だと考える。

名古屋市の絶滅危惧種のリストに取り上げた種の主な選定理由は次の三つに大別することができる。

その一つは、工事・土地開発などの影響により生息環境が減少した（または減少しつつある）と思われるもので、次の種が該当する。

ワスレナグモ・カネコトタテグモ・キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモ・ミナミコモリグモ・エビチャコモリグモ・クリチャササグモ・オビボソカニグモなど。

次に、全国的に、あるいは県内・市内において、広い範囲に分布する割には生息する個体数が少ないと考えられる種である。これらの種は、微妙な環境の変化で生息できなくなってしまうと考えられる。言い換えれば、似たような環境でも微妙な違いで、生息可、不可が決定すると考えられる次のような種である。

コガネグモ・トリノフンダマシ・オオトリノフンダマシ・シロオビトリノフンダマシ・アカイトリノフンダマシ・ゲハウグモ・ムツトゲイセキグモ・ハヤテグモ・ハマキフクログモ・ギボシヒメグモ・ビジョオニグモ・トゲグモ・チビクロドヨウグモなど。

さらに、限定された特殊な環境にしか生息できず、その環境が悪化したため減少した（またはその恐れがある）と考えられる種である。たとえば、湿地性のテジロハリグモと、河川部の塩性葦原に棲むカコウコモリグモが該当する。追加種として、湿地に依存性の強いスジブトハシグモをくわえた。

今回見直した結果、カテゴリーランクがアップとダウンした種は以下である。

アップ種は①キノボリトタテグモが絶滅危惧ⅠB類 (EN) から絶滅危惧ⅠA類 (CR) へ。②チビクロドヨウグモが情報不足 (DD) から絶滅危惧ⅠB類 (EN) へ。

ダウン種は①ミナミコモリグモが絶滅危惧ⅠB類 (EN) から絶滅危惧Ⅱ類 (VU) へ。②シロオビトリノフンダマシが絶滅危惧Ⅱ類 (VU) から準絶滅危惧 (NT) へ。③ヤギムマフクログモが絶滅危惧Ⅱ類 (VU) から情報不足 (DD) へ。その理由は別章で述べる。

また、ムロズミソレグモ (スオウグモ科) は、現在まで大阪府・京都府・奈良県・兵庫県・島根県・山口県・愛媛県で記録されている (新海他, 2018)、名古屋市では 1977 年に採集されが、その後は確認されていない。謎に包まれたクモである。おもに家屋内から発見されるが、生態的に不明の点が多いので情報不足にランクされている。

### ③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各クモ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

#### 【掲載種の解説（クモ類）に関する凡例】

##### 【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産クモ類目録 Ver.2014R1」（谷川明男，2014：インターネット上にて公表）に準拠した。

##### 【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産クモ類目録 Ver.2014R1」（谷川明男，2014：インターネット上にて公表）に準拠した。

##### 【評価区分】

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち2020」「レッドデータブックあいち2020」（愛知県，2020）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

##### 【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

##### 【形態】

対象種の形態の概要を記述し、生態写真または標本写真を掲載した。

##### 【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。

##### 【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

##### 【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

##### 【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

##### 【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

##### 【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

##### 【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

スジブトハシリグモ *Dolomedes saganus* Bosenberg et Strand

評価区分

【評価理由】

湿地、湿潤地、草地に生息する。もともと個体数は少なく、そのうえ生息地の環境悪化や消滅で減少傾向にある。

名古屋市2020	絶滅危惧IB類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【形態】

体長雌 13~19mm、雄 10~14mm。雌雄とも背甲、腹部とも赤褐色または茶褐色。両側は白色で縁どられ目立つ。腹部に 6~7 対の小白色が並ぶ。4脚とも茶褐色または黒褐色。



スジブトハシリグモ (雌)  
守山区小幡緑地、2014年3月24日、緒方 清人 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区。

【県内の分布】

犬山市で確認しているが、三河地方からは発見されていない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

湿地に生息する。徘徊性で地表を歩きまわるが、時には水面に浮いたり、水面上を素早く移動する。卵のうは触肢と牙を使い、抱え込むような姿勢で持ち歩く。

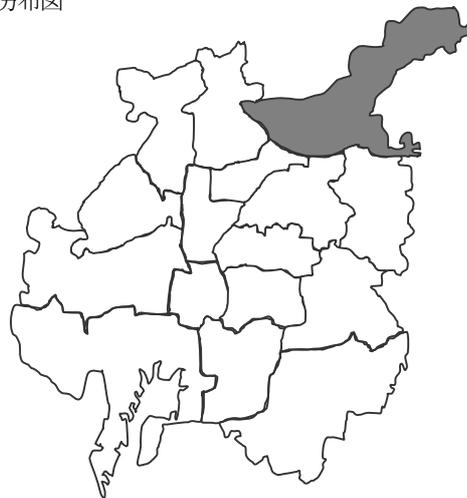
【現在の生息状況／減少の要因】

守山区小幡緑地の限られた湿地に、数頭から多くて 10 頭前後が生息する。湿地の消滅で急速に減少している。

【保全上の留意点】

生息地の保全が最も望まれる。

市内分布図



【関連文献】

- 小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類, p.218. 東海大学出版会, 神奈川.  
小野展嗣・緒方清人, 2018. 日本産クモ類生態図鑑, p315,p554. 東海大学出版部, 神奈川.  
新海栄一, 2010. ネイチャガイド 日本のクモ. P145. 一総合出版, 東京.  
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.171. 保育社, 大阪.